

「このお方に人生をかける」

～どうしてもこのお方について行きたい～

「私の願いは、キリストをさらに深く知りたいということであり、キリストを復活させた超自然の力を体験すること、つまりキリストの苦しみにあずかり、生れながらの利己的な自分に死んで、キリストと共に死人の中から復活し、命にあふれるという体験をし続けることである。私がもうそれを自分のものにしたとか、もう完成された者になったとか言っているのではなく、それを自分のものにしようとして追いつめている。それは、すでに私秘キリスト・イエスにしっかり捕まえられているから出来るのである。」ピリピ人への手紙3章10-12節 現代訳

パウロの生き方を見ていると感ずることがあります。それは一貫性があるということです。一本の筋が通っているということです。しかもそれが自然で、何とも確信に満ちているということです。そういう生き方にとても魅了されます。自分自身もそうでありたいと願うものです。しかし、自分自身の生き方を見てしまうとどうしてもどうやってもそこまでの世界に到達できそうもないと感じてしまうのです。しかし、果たして本当にそうなのでしょうか？

本当はパウロも私たちと同じように弱さを持った人間でした。それが一貫性を持って生きられたのは、キリストにしっかりと捕まえられていたからでした。では、一体何が彼をキリストに結び付けていたのでしょうか？それはその彼の弱さや闘いこそが彼をそうさせていました。彼が弱さや闘いを覚える度に、「主に従うのだ！」と思いを切り替えていたのだと思います。

本日はこのピリピ書3章を「信仰者の過去・現在・未来」ということで見てみました。この世的な考え方、肉によって生きてきた生き方から解放され、何が何でもキリストに従うのだ！という一心不乱な生き方へと変えられ、その結果、栄光に満ちた天の御国へと確実に導かれることを待ち望み、希望と平安によって満たされて歩む生き方へと私たちは変えられました。

しかし、私たちはその解放された世界に生きているにも関わらず、簡単に間違った肉体的、世的な生き方に逆戻りしてしまって、不信仰のゆえに、不安と恐れに満ちた生き方へと変わってしまうこともパウロは警告しています。だからこそ、「信者の皆さん。主を信じる者として喜んでいなさい。前に送った手紙でも書いたが、ここでもう一度書こうと思う。それを、私は決して煩わしいとは思わないし、あなたがたにとってもその方が安全だと思う。」

私たちを攻撃してくる悪魔の常套手段は、私たちの心から「喜び」を奪い、「恐れ」に満たすことです。私たちの心に与えられている、主の恵みによる「喜び」をしっかりと握ってなければなりません。そのためには、常に主を見上げることをあきらめない、止めないことです。主にしっかりと捕まえられている必要があるのです。「わたしを離れたら、あなたがたは何一つすることはできません」(ヨハネ15:5)。イエス様こそが道であり、真理であり、命であるお方だから。